15　次の文章は『和泉式部日記』の一節である。読んで、後の設問に答えよ。 〈千葉大〉　二〇一五年度出題

　かくて、二三日①音もせさせたまはず。頼もしげにのたまはせしことも、②いかになりぬるにかと思ひつづくるに、いも寝られず。目もさまして寝たるに、

③夜やうやうふけぬらむかしと思ふに、門をうちたたく。あなおぼえなと思へど、問はすれば、宮の御文なりけり。思ひがけぬほどなるを、「心や行きて」とＡあはれにおぼえて、妻戸押し開けて見れば、

　　④見るや君さ夜うちふけて山の端にくまなくすめる秋の夜の月

うちながめられて、つねよりもあはれにおぼゆ。門も開けねば、御使待ち遠にや思ふらむとて、御返し、

　　Ｂふけぬらむと思ふものから寝られねどなかなかなれば月はしも見ず

とあるを、おしたがへたる心地して、「Ｃなほくちをしくはあらずかし。いかで近くて、かかるはかなし言も言はせて聞かむ」とおぼし立つ。

（注）○宮＝敦道親王。はるかに身分の隔たった和泉式部と、恋愛関係にあっ

た。

　　　○妻戸＝寝殿造りの建物の四隅にある両開きの板戸。この戸を開くこと

で月光が差し込んできて、手紙を読むことができる。

　　　○御使＝宮からの手紙を持ってきた使者。

　　　○おしたがへたる心地＝宮の心情。和泉式部からの返事を読んで意表を

つかれた宮の思い。

問１　傍線部①～④を現代語訳せよ。

問２　傍線部Ａ「あはれにおぼえて」とあるが、和泉式部はなぜこのように感

じたと考えられるか、説明せよ。

 ◎問３　傍線部Ｂの歌を現代語訳せよ。

 ◎問４　傍線部Ｃ「なほくちをしくはあらずかし」とあるが、宮はなぜこのように感じたと考えられるか。歌のやりとりを踏まえて、傍線部Ｃの内容が明らかになるように説明せよ。

問５　波線部「られ」を例にならって文法的に説明せよ。

（例）ぬ＝打ち消しの助動詞「ず」の連体形

問６　次のア～オの中から、和泉式部と同時期に活躍した人物を一人選び、記号で答えよ。

ア　額田王　　　イ　式子内親王　　　ウ　小野小町

エ　清少納言　　オ　後深草院二条

# 【解答と採点基準】

問１　①＝（宮は）便りもなさらない

　　　②＝どうなってしまったのであろうか

　　　③＝（今頃はきっと）夜がしだいに更けているのであろうよ

　　　④＝あなたは見ているか

問２　Ａ宮のことを思い寝られない夜を過ごしていたところ、Ｂ宮からの手紙が

来たので、Ｃ自分の気持ちが宮に届いたのだろうかと思ったから。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝６／Ｂ＝４

問３　Ａ（今頃は）きっと夜も更けているだろうと思うものの、Ｂ宮のことを思って眠れません。Ｃ月を見るとかえって物思いが募ってつらいので、Ｄあえて月だけは見ておりませんでした。

ＣとＤの内容がおおむねそろっていなければ全体０。Ｃ・Ｄが答えてあった上で採点する。

Ａのうち「ぬらむ」の強意の現在推量の訳になっていないものは減点２。「ものから」の逆接のないものは減点２。

Ｂのうち「宮のことを思って」のないものは減点２。

Ｃのうち「しも」の強意の訳がないものは減点２。

問４　和泉式部からは「わたしも月を見ている」といった内容の歌が返ってくるとＡ予想していたのに、「月を見ていない」というまったくＢ逆の内容だったので、意表をつかれた思いでＣかえって式部に心惹かれたから。

Ａ・Ｂ・Ｃが順番にそろって記述されていないものは全体0。

Ｃの「心惹かれた」は、「興味をもった」「魅力を感じた」なども可。

問５　自発の助動詞「らる」の連用形

問６　エ

# 【現代語訳】

　こうして、二、三日（宮は）なんのお問１①便りもなさらない。期待できそうにおっしゃったことも、問１②どうなってしまったのであろうかと思いつづけると、眠ろうにも眠ることができない。目を覚まして横になっていると、問１③夜がしだいに更けているのであろうよと思うころに、門を叩く（音がする）。ああ（誰かしら）思い当たることがなかったけれど、（取り次ぎの者に）尋ねさせると、宮からのお手紙であった。（夜も更けて）思いもかけない時刻なので、「気持ちが通じたのか」としみじみとうれしく思われて、妻戸を押し開け（させ）て（お手紙を）見ると、

　問１④あなたは見ているか。夜が更けて山の端（近く）に曇りもなく澄んでいる（わたしの見ている）秋の夜の月を。

自然と（月が）眺められて、普段よりも（宮のお歌が）しみじみと感じられる。門も開けていないので、（宮の）使者は待ち遠しく思っているであろうと思って、ご返歌を差し上げる、

　問３（今頃は）きっと夜も更けているだろうと思うものの、（宮のことを思って）眠れません。月を見るとかえって物思いが募ってつらいので、あえて月だけは見ておりませんでした。

と（詠んで）あるのを、（宮はわたしが同じ月を見て宮を偲んでいます、という歌を返歌してくれるであろうと予想していただろうが）意表をつかれた気持ちがして、「やはり（あの女は）つまらぬ女ではないことよ。なんとかして身近において、こういう（なんにもならない）気慰めの和歌でも詠ませて聞きたいものだ」とご決心なさる。